

新版

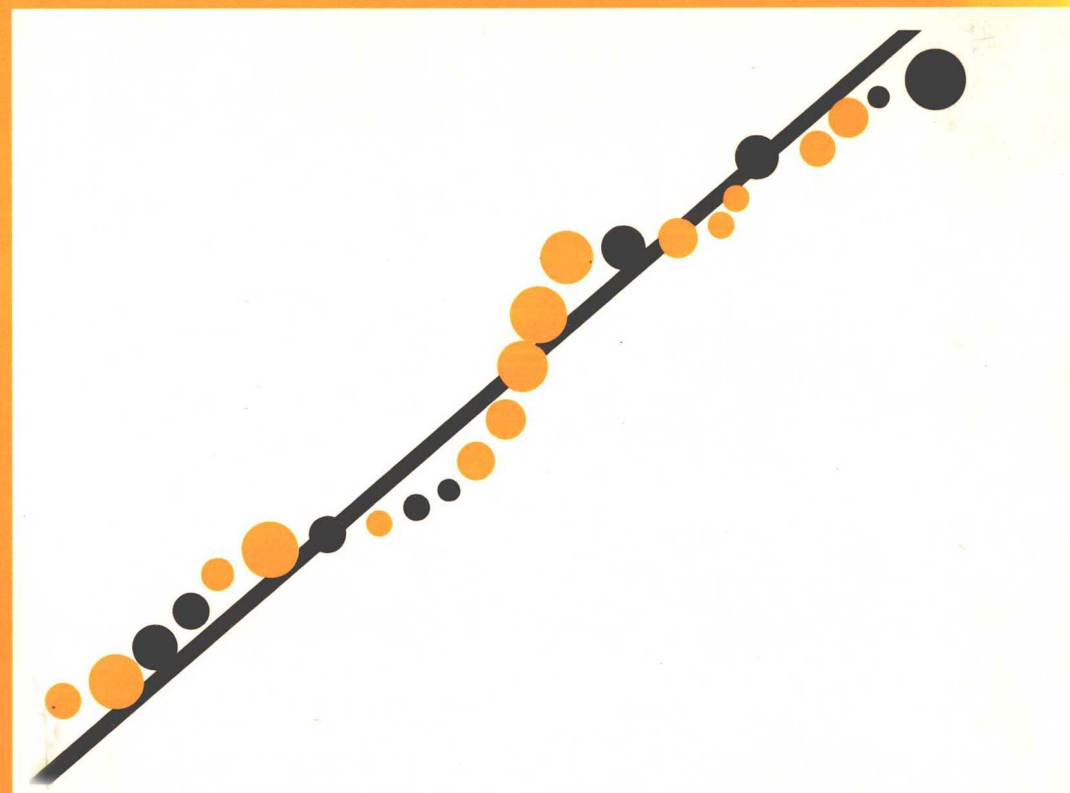
マクロ経済学入門(上)

リチャード・T・ギル 著

久保芳和／長谷川隆彦 訳
篠原 久／片岡俊郎

ECONOMICS AND
THE PUBLIC INTEREST

RICHARD T. GILL



東洋経済新報社

新 版
マクロ経済学入門
(上)

リチャード・T・ギル 著
久保芳和／長谷川隆彦 訳
篠原 久／片岡俊郎

東洋経済新報社

Original Title

ECONOMICS AND THE PUBLIC INTEREST, 4th Edition
by Richard T. Gill

Authorized translation from the English-language edition
published by Scott, Foresman and Company, Glenview,
Illinois, United States of America.

Copyright © 1980 in the United States of America by
Scott, Foresman and Company. All Rights Reserved.

序 文

本書は経済学の半学年コースを受講しようとする学生や経済学に興味をもつ市民で現代経済分析への一般的序論を望むもののために書かれたものである。そのねらいは、この研究分野のどんな側面をも取り扱う包括的な教科書と現代経済学とは何かを(分析することなしに)述べている随時の通俗論説との間に存在しているギャップを埋めることにある。その焦点は、国民所得、インフレーションと失業、国際収支、成長と発展といった、**マクロ経済学上の重要な話題**におかれる。

この第4版では、以前の諸版でかかげておいた目標を心に留めること、すなわち経済分析が最も直接的かつ即時的な関係をもつような公共の関心事を取りあげることに努めた。これらの問題は、もちろん、たえず変化している。本書中の資料を最新のものにするために、若干の諸章、例えばインフレーションや国際貿易に関する諸章などは、ほとんど完全に、書き直さねばならなかった。また現時点で特別な興味をひくと思われる新しい話題、例えば租税に基づいた

ii 序 文

所得政策や中国の経済的發展などをつけ加えた。こうしたものを包摂する余地をつくるために、他の資料をカットしてページ数をけずり、適切な長さにした。もし本書を十分拡大していたら、実際、本書の特別目標を無に帰することになったであろう。

こういう選択が容易になったのは、現在では本書が私の別著 *Economics and the Private Interest*, 2nd ed. と補完関係にあるからである。そして完全な、通年コース用には、もっと大部のテキスト *Economics: A Text with Readings*, 2nd ed. を著してある。これら3著の関係は次の通りである。

Economics and the Public Interest(読者がいま読んでいる本書) マクロ
経済学上の重要な話題に強調点をおいた経済学概論。

Economics and the Private Interest ミクロ経済学序論。

Economics: A Text with Readings 上記2著を結合し拡大したものに、70
以上の補充文献を追加したもの。

本書を書き上げるにあたっては、わたくしはハーバード大学の経済学原理コースの主事としての9年間を含む約20年間の教授経験を参考にしたし、ニュー・イングランド教育テレビに15週間の経済学コースを提供した経験をも参考にした。このテレビ・コースでは、本書を書き上げる際に指針となったものに似た選択原理をとらざるをえなかった。その経験から知らされたことは、経済学の基礎原理を簡潔に伝達することは多少とも困難であるが、そうすることは可能だし望ましくもあるということであった。

この種の書物を書き上げる場合に他の人びとにこうむるおかげは常に大きいものがある。例によって、発行者たるアルフレッド・W・グッドイヤーは、敬意が払われるべき名簿上の先端に位するし、学生用の手引き書を準備して下さった、サイプレス・カレッジのジェイムズ・A・フィリップ教授はいろいろな形で援助して下さった。本書の生い立ちの全行程にわたって、私はケネス・ディッチ博士、ロバート・エーデルシュタイン教授、ジョン・E・エリオット教授およびフランシス・レー教授からの数多くのコメントによって助けられた。またこの第4版を仕上げるにあたっては、サアレ・コストルとジャック・ラニン

グは常に力になってくれた。

もっと広くいえば、わたくしは経済学の基礎原理を伝達するうえでおよそ学
びえたものを集団としてわたくしに教えてくれたすべての同僚諸氏と、かつて
の学生諸君、および辛抱強さと熱意によってこの仕事を可能にしてくれた妻ベ
ッティにおかげをこうむっている。

リチャード・T・ギル

目 次 (上巻)

序 文

第Ⅰ部 現代の経済：問題，制度および体制

1

経 済 問 題 3

経済的崩壊：過去と現在 4

経済問題の性格 8

稀少性と選択 10

経済的可能性：図表 11

主要な経済問題への応用 15

2

市 場 経 済 22

市場を通しての選択 22

古典派経済学者の解決 25

需 要 曲 線	27
供 給 曲 線	31
供給曲線の背後にある仮定	33
供 給 曲 線 の 形	36
需要と供給の「法則」	38
消費者主権：単純な例	40
市 場 と 公 益	43

3

経済計画，マルクス，統制経済	48
マルクスによる批判	49
革命：理論と実際	53
統制経済の機能	54
ソビエト経済：成功と失敗	58
ソビエト体制の将来	63

4

合衆国の混合経済	68
合衆国における政府活動の増大	69
政府活動拡大の諸原因	72
政府介入の一例：合衆国の農業	75
現代の株式会社の発展	79
非価格競争の実例	82
労働組合とアメリカの労働	85
賃金率への労働組合の影響の実例	88

第Ⅱ部 集計としての経済：国民所得，雇用， インフレーション，貨幣および貿易

5

ケインズ経済学：概観と批判	97
マクロ経済学の領域	97
マクロ経済の諸問題の実例	98
初期の諸見解	101

viii 目 次

国債に関する相反する見解	183
議論と事実	184
国債の得失	190

下 巻 内 容

第Ⅱ部 集計としての経済：国民所得，雇用，インフレーション，貨幣および貿易（つづき）

10 貨幣と国民所得

- 貨幣とは何か
- 貨幣と銀行制度
- 個別銀行の貸借対照表
- 制度を通しての乗数的信用創造
- 貨幣の役割——概要
- 投資とGNPの環
- 利子率と投資の環
- 貨幣供給と利子率の環

11 貨幣，貨幣政策，およびマネタリズム

- 連邦準備制度
- 概 括
- 貨幣政策の若干の限界
- マネタリストの反対意見
- 数量説との関係
- 財政政策と貨幣的效果

12 インフレーション

- インフレーションと公益
- インフレーションの効果

x 目 次

インフレーションの諸原因
マネタリストの説明
インフレーションと失業——スタグフレーション
市場力と「コスト・プッシュ」
インフレーションの追加的諸原因
フィリップス曲線とそれらの問題点
インフレーションと戦うマクロ諸政策
勧告と統制
租税に基づいた所得政策

13 国 際 収 支

開放経済下の国民所得決定
国際収支勘定
収支の意味
さまざまな為替機構：固定対伸縮
古典的金本位制度
固定為替の放棄
変動為替相場制度についての賛否両論
周到な結論

第Ⅲ部 成長，開発および将来の展望

14 近代の経済成長

近代の経済成長の略史
合衆国における成長の趨勢
近代の成長における主因
人口増加
資本蓄積
技術進歩

15 開発途上国

経済的低開発の意味
歴史的発展対現代の発展
西欧技術の適用
資本蓄積
人口問題
農業の特別な地位

中国における経済発展

16 若干の将来の展望

近代成長は維持しうるのか

エネルギー危機の考えられうる諸帰結

成長は望ましいものなのか

国家，私的個人，および公益

訳者あとがき

索 引

第Ⅰ部

現代の経済

問題，制度および体制

経 済 問 題

われわれはみな経済学について多少は知っているが、それは、われわれが自分の社会の経済生活に毎日関与しているからである。「かせぐことと費やすことに、われわれは力を浪費している」とワーズワースは嘆いたが、この嘆きは近代の産業経済とはっきり関連している。われわれは目覚めている時間の大部分を現に「かせぐことと費やすこと」にすごしている。もし利口であれば、われわれはこの過程のあいだ中、節約しようとさえする。われわれは買うものを節約しようとするし、売りに出す生産物やサービスを産み出すための時間や努力を節約しようとする。

こういう点で、われわれは国の経済制度に参加しているし、その制度がどのように機能しているかを日々ある程度見抜いているのである。

しかしながら、平素は、経済学はわれわれの個人的知識や経験とはずっとかけ離れた事柄を取り扱っているようにみえるし、事実、それはわれわれの個人的統御のはるか埒外にあるようにみえる。株式相場は騰落する。アジアやアフ

4 第I部 現代の経済 ●

リカの幾百万の人びとは飢えている。一般生計費は上昇している。このような場合には、われわれは外的諸力によって統御されていると感じ、マーク・トウェインが天気について言ったように、「だれでも天気について語るが、だれもそれを左右するものはない」と言いがちである。このような場合には、経済学の研究は面白くはあるが不明瞭で困難にみえる。

経済的崩壊：過去と現在

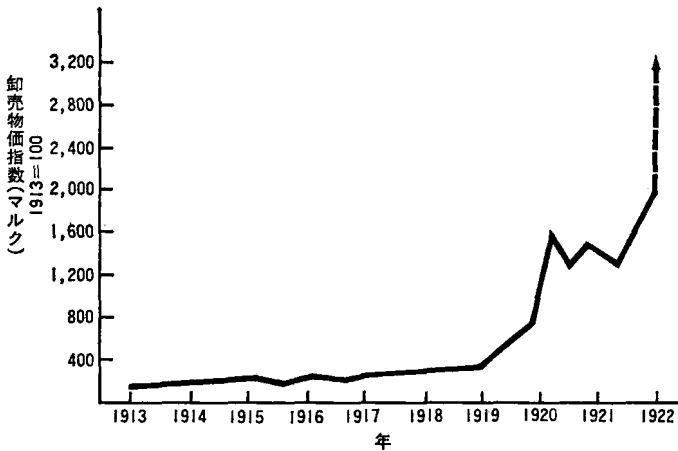
近代の産業経済についての注目すべき事柄は、それが非常に円滑に機能しているということである。しかしながら、われわれがこの注目すべき事実を認識するようになるのは、主に制度が崩壊するときである。そしてだれも次の事実、すなわち経済制度は必ず崩壊するものであり、それが崩壊する場合には、その損害と結果は数えきれないという事実を見そこなわないようにしよう。

■ 第1次大戦後の超インフレーション

第1次世界大戦後のインフレーションの問題をとりあげてみよう。戦争の余波としてすべてのヨーロッパ諸国では物価は騰貴した。そしてそれはどれほどの率だったことか。イギリスやフランスでは戦前水準の3倍か4倍に騰貴したし、オーストリアでは騰貴は戦前水準の1万4,000倍、ハンガリーでは2万3,000倍、ポーランドでは250万倍、そしてロシアでは40億倍であった。しかし、このような異常な騰貴でさえ、インフレーションの力が非常に激しく作用した結果社会の機構を破壊したも同然であったドイツのそれに比べると、見劣りする。

図1-1は1920年代のドイツの卸売物価水準に生じた現象を、それもある点までの現象を示している。1922年までに指数値はカーブを本書のページの頂上まで押しあげ、普通の規模の部屋の天井を超えるまでになったであろう。1923年までに、カーブは視界から消えて雲中に没したであろう。1923年の9月には、ドイツの卸売物価は、マルクで換算すると、10年前の水準の2,400万倍がた騰貴した。2ヵ月後には、この数字は1兆に近かった。人びとが週給を持ち

図 1-1 1920 年代のドイツの超インフレーション



これはまったくお手あげになったインフレーションの一例である。1913年に100であった卸売物価指数が、1923年の11月までに73兆の水準に達した。

帰るのに手押車を用いたり、マルク紙幣の方が家の壁紙よりずっと安かったとしても不思議ではない。

■ 大 不 況

あるいは、1933年の合衆国をとりあげてみよう。この年は大不況の最悪の年であって、1,200万ないし1,400万のアメリカ人——全労働力の25%ないしそれ以上——が失業していた。この社会的な大災害にまきこまれた個々人の難儀を想像するのはむずかしい。オハイオ州のヤングスタウンの市長は、次のような記事はこの時期の新聞記事としてはまれなものではないと記録している。

10児の父投身自殺

橋からとび降り、泳ぎはじめた

が、断念す。2年間失業中。

2年間失業中の、10児の父、57歳のチャールズ・ウェインは本朝スプリング・モモン橋上に立って、出勤途上の幾百人の人びとを眺めていたが、上衣を脱いで、それを入念にたたんだ後、渦巻くマホニング川へとび込んだ。ウェインはヤングスタウン